

ダイズ品種「タチナガハ」の最適生育量

新田 靖晃・山田 英雄*

(福島県農業試験場・*福島県農業試験場会津支場)

Optimum Growth Volume of Soybean Cultivar 'Tachinagaha'

Yasuteru NITTA and Hideo YAMADA *

(Fukushima Prefecture Agricultural Experiment Station・*Aizu)
(Branch, Fukushima Prefecture Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

1996年に福島県の奨励品種に採用されたダイズ品種「タチナガハ」は、機械収穫適応性が高く、県内の畑作地帯を中心に作付が拡大している。本報では、県内畑作地帯のうち、中通り及び会津地方における「タチナガハ」の安定生産のための生育指標を検討し、あわせて最適生育量から最適な栽植本数について検討した。

2 試験方法

試験は、1995年・1996年の2カ年、中通り地方として福島県農業試験場本場（郡山市）及び会津地方として同会津支場（会津坂下町）で行った。試験区の構成は表1のとおりである。標準区を畦間70cm×株間20cm（栽植本数1,430本/a）、密植区を畦間70cm×株間15cm（栽植本数1,900本/a）、極密植区を畦間70cm×株間10cm（栽植本数2,860本/a）とした。比較品種にはスズユタカを用いた。なお、会津支場では標準区と密植区の2区のみで試験を行った。

表1 試験区の構成

播種期	場所	株間（栽植本数/a）		
		標準 20cm (1,430本)	密植 15cm (1,900本)	極密植 10cm (2,860本)
標準播種期 ¹⁾	本場	● ○	○	○
	会津支場	● ○	○	—

注. ○はタチナガハ, ●はスズユタカ。畦間は70cm。
1): 6月上旬

3 試験結果及び考察

(1) 子実重

タチナガハの目標子実重をスズユタカの平年子実重（32 kg/a）をやや上回る35kg/aに設定した。a当たり子実重は図1の通りであった。1995年の本場を除き、概ね目標の35kg/a水準を確保した。また、スズユタカより多収であった。

収量構成要素のうち、m²当たり稔実英数と百粒重は表2のとおりであった。スズユタカに比べ稔実英数が少なく、百粒重が重い特徴がみられた。栽植本数と稔実英数及び百粒重の関係は判然としなかった。

主茎長・茎径・倒伏について表3に示した。栽植本数が多くなると主茎長が長くなる。また、本場では茎径が細くなり倒伏しやすい傾向が1995年に認められた。

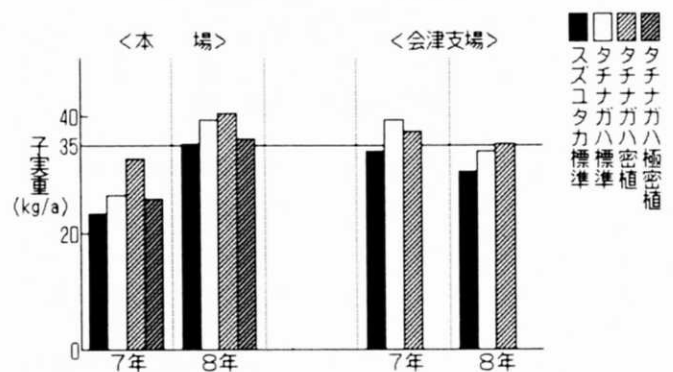


図1 栽植密度と子実重 (kg/a)

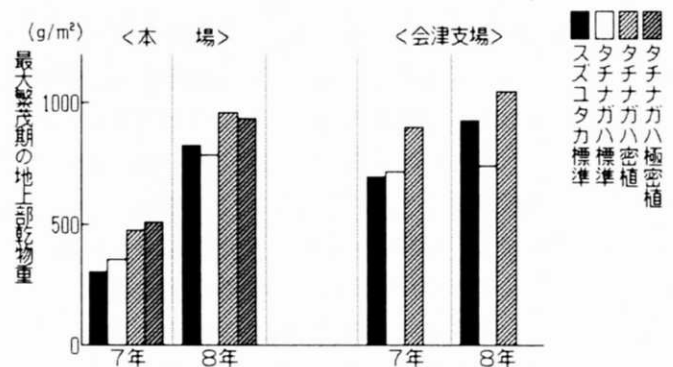


図2 栽植密度と最大繁茂期における地上部乾物重 (g/m²)

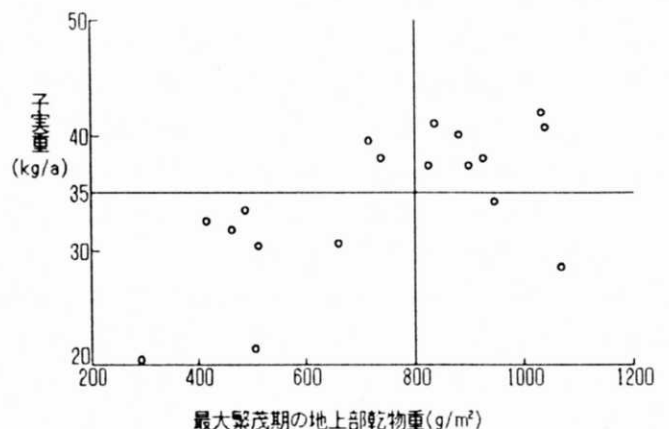


図3 最大繁茂期の乾物重と子実重の関係

表2 稔実英数及び百粒重

場所	年次	稔実英数 (英/㎡)				百粒重 (g)			
		スズユタカ		タチナガハ		スズユタカ		タチナガハ	
		標準	標準	密植	極密植	標準	標準	密植	極密植
本 場	1995年	500	391	484	402	26.2	37.2	36.9	35.8
	1996年	537	417	422	387	28.0	37.8	37.5	38.5
会津支場	1995年	940	815	767	—	23.9	28.1	28.1	—
	1996年	774	558	627	—	28.1	40.6	40.2	—

表3 倒伏及び成熟期の生育

場所	年次	主 茎 長 (cm)				茎 径 (mm)				倒 伏 ¹⁾			
		スズユタカ		タチナガハ		スズユタカ		タチナガハ		スズユタカ		タチナガハ	
		標準	標準	密植	極密植	標準	標準	密植	極密植	標準	標準	密植	極密植
本 場	1995年	60	60	63	72	7.4	7.5	7.2	6.4	2	2	3	3
	1996年	81	84	93	102	8.5	8.0	7.5	6.4	3	2	2	2
会津支場	1995年	86	92	101	—	5.1	4.0	4.4	—	2	1	1	—
	1996年	91	97	103	—	5.1	3.9	3.3	—	2	1	1	—

注. 1): 0 ; 無 1 ; 微 2 ; 少 3 ; 中 4 ; 多 5 ; 甚である

(2) 最大繁茂期の地上部乾物重及び最適生育量

最大繁茂期の㎡当たりの地上部乾物重は図2のとおりであった。栽植本数が増えると地上部乾物量は増加する傾向がみられた。

(3) 最適生育量及び最適栽植本数

図3から子実重35kg/a水準を得る最大繁茂期の地上部乾物重は800g/㎡前後であった。また、800g/㎡前後より重くなっても子実重の増加にはならなかった。このことから、最大繁茂期に地上部乾物重800g/㎡の生育量を確保すればよいと判断された。本場の1996年は各区とも800g/㎡が確保されたが、1995年では生育量が不足し低収となった。会津支場では、いずれも概ね800g/㎡確保され

た。

乾物重800g/㎡を得るためには、本場では密植により生育量を確保する必要があり、会津支場では標準栽植本数でよいと考えられた。

4 ま と め

目標の子実重35kg/a水準を得るためには、最大繁茂期に地上部乾物重800g/㎡前後を確保する必要がある。この乾物重を確保するには、中通り地方では密植（畦間70cm×株間15cm（1,900本/a））する必要があり、会津地方では標準栽植本数（畦間70cm×株間20cm（1,430本/a））が適当であると認められた。